

〈小論文〉

次の記事を読み、以下のことに答えつつ、論文にまとめなさい。

- ・ 女性はなぜ号泣したと思いますか。
- ・ 「患者の悩みもケアする」ためにはどんなことが必要だと思いますか。
- ・ あなたの理想とする看護師はどんな看護師ですか。（800字以内）

大腸がんの抗がん剤治療で愛媛大病院（愛媛県東温市）に通う女性（71）は、今年4月、看護師の大西真由美さん（42）の前で大泣きした。生まれて初めて人前で泣いた。

県内の地元に夫と娘夫婦、小学生の孫たちがいる。親戚は50軒。行事に100人以上が集う地域の老人会で役員を務め、総会や忘年会、各行事の世話を飛び回ってきた。

「誰にも迷惑や心配をかけたくない。弱音を吐くもの嫌だ」「がんのことは娘以外に話していない」「治療が無理なら、地元の病院に転院したい」……。

3月の入院前、外来診療の段階から、そんな胸の内を大西さんには少しずつ打ち明け、気持ちを整理してきた。

手術日が迫った。医師から「同時に人工肛門もつくる」と宣告され、「そうまでして生きたくない」とパニックに陥ったときも、大西さんががん専門の看護師と共に来てくれた。

号泣したのは、2人と話すうち、「せっかくの命やから、孫や子のために一日でも長く生きて、楽しみを残してあげたい」という言葉が口からこぼれ出た瞬間だ。

自分の言葉に自分で驚いた。強い母、地元の世話役ゆえに抑え込んできた「本音」に、ギリギリのタイミングで気づくことができたのだ。

手術を終えると、緩和ケアや人工肛門の専門の看護師もやってきた。退院後も大西さんから、「人工肛門がうまく使えているか」と気遣う電話があった。

大西さんらこの女性に関わった看護師は、今年4月に院内に正式発足した「総合診療サポートセンター」の専従スタッフだ。がんや患者支援のベテラン看護師と医療ソーシャルワーカーら約30人が、入院前から患者や家族に積極的に関わり、悩みや将来の希望などの情報を積み上げ、共有する。

入院後、患者は治療で精いっぱいになるが、「入院の時間を日常生活から分断させず、うまく、速やかに生活に戻れるようサポートする」のが同センターの役割。全国的にも先進的な取り組みで、その先に、院内外が患者視点で連携し、大学病院が「県民の生活資源の一つ」となる新たな医療システムを思い描く。

現在、女性は家族全員の支えを得て、地元での暮らしを満喫している。「今この時を生きることが私の健康。でも、そんな健康観を私一人ではつくれなかった。大学病院が、人生を考える手助けをしてくれた」。通院時、大西さんに会うことが今も大きな楽しみという。